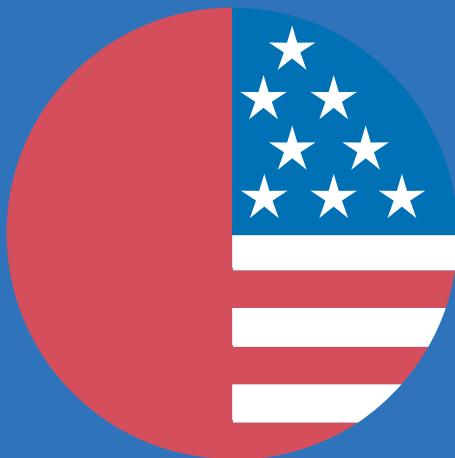




# 第64回日米学生会議

Japan-America Student Conference



Japan-America Student Conference



衝突と理解から生まれる新たな意志

～未来を構築する力へ～

**Share in the Present, Connect for the Future:  
Strengthen Ties to Inspire Change**

主催：財団法人 国際教育振興会

企画・運営：第64回日米学生会議実行委員会

後援：外務省 文部科学省 米国大使館 日米文化センター 社団法人日米協会（予定）

賛助：公益財団法人三菱 UFJ 国際財団 財団法人双日国際交流財団 財団法人平和中島財団 他（予定）

# 日米学生会議 Japan-America Student Conference (JASC) とは・・・

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年、満州事変を契機に悪化していく日米関係を憂慮した4人の日本人学生が太平洋を渡り創設した、日本初の国際的な学生交流プログラムである。創設時より学生自身の手による会議の企画、運営が行われ続けており、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ幾多の困難を乗り越えながら現在まで、77年の歴史を築いてきた。そして、学生達は1ヵ月という時間をかけて世界の様々な問題を取り組み、率直な対話で相互理解を深め、将来の平和の実現に貢献する、という設立時の理念は継承され、今日に至っている。

全ての参加者は7つの分科会のいずれか1つに属し、5月から夏の本会議に向けて事前準備活動を行う。本会議は7月末から8月末にかけて隔年で日本またはアメリカで開催され、日米それぞれ36人、合計72人の学生が1ヵ月にわたり複数の都市を訪ねながら共同生活を行う。分科会ごとのディスカッションやテーマに即した施設や企業、専門家を訪れ見識を深めるフィールドトリップ、また参加者の興味に応じた自由な議題設定による意見交換の場であるスペシャルトピックや会議中感じたことを全員で共有するリフレクション、そして各訪問都市に深く関連する問題を取り上げるフォーラムの開催などを通して、約1ヵ月間共に考え抜く。

第64回日米学生会議は、2012年夏アメリカで開催される。日米学生会議の新たな1ページが今、始まろうとしている。

## 第64回日米学生会議実行委員会より



### 実行委員長からのご挨拶

2012年は、アメリカを始め、世界各国で選挙や政権交代が行われ、国際政治の転機を迎えるだろう。国際社会における各国間の結び付きがますます強固になる中、この政治的変化は世界に大きな影響を及ぼすはずだ。中国を始めとする新興国の台頭により、国際関係も変動しつつある今、私たちは、日本の立場のみならず、安全保障や経済の面で非常に強い相互依存関係を持つ「日米」の関係について再考する必要がある。

また、2011年3月11日に発生した未曾有の大震災とそれによる原発事故は世界に大きなショックを与えた。震災から1年を迎え、より具体的な復興政策や各国からの協力が引き続き必要となる。日本は、災害大国そして原発事故発生国として、改めて災害対策を打ち出すとともに、原発を巡るエネルギー政策を見直し、世界に発信していく責任がある。私たちも学生として、長期を要する震災復興に今後どのように関わり、貢献することができるかを考えねばならない。

このような中開催される第64回日米学生会議では、日米両国から問題意識の高い学生が集まり、激動する世界においていかに日米が連携し、世界的財政危機や環境問題など両国を取り巻く国際問題に対処していくべきか、1ヵ月をかけて議論し、考える。特定の利害に縛られない学生だからこそ、自由な意見を発信し合うことができる。多様なバックグラウンドを持つ日米学生の率直な意見は、時に「衝突」を生むだろう。しかし、互いを尊重し合いながら、意見や価値観を「理解」するよう努めていく中で、自身の新たな視点や課題を見出し、未来へ向けた「意志」を育むことを目指す。参加者一人一人が、学生としての目標や課題、同時に国際社会の一員として将来担っていくべき役割を模索し、共に未来を構築するために行動を起こすきっかけになることを期待する。

日本側実行委員長 山下 祐里奈

### Message from Chair

In July of 2012, delegates of the 64th JASC will meet in the United States to discuss current issues facing both Japan and the US. Many high profile elections will occur worldwide in 2012, including in the United States. This time, when possible futures are being debated, will be an opportunity for delegates to explore a variety of issues providing them with the opportunity to become involved in the international community.



The delegates of the 64th JASC will add their perspectives and discussions to the long history of JASC. By travelling to four different and disparate sites throughout the United States, delegates will be able to gain a deeper understanding of the variety of current issues through field trips, forums, and discussions. In their roundtables, delegates will be able to gain insight into the issues that are important to the U.S.-Japan relationship. Delegates will also be able to carry our alliance into the future. The ties forged at JASC will allow delegates to both engage in the present and ensure that the bond between Japan and America will continue to strengthen in the future.

Jillian Anderson, Chair, American Executive Committee

## 第64回日米学生会議 実行委員会

山下 祐里奈（実行委員長）  
国際基督教大学 教養学部

川邊 拓也（副実行委員長）  
立命館大学 法学部

伊藤 実梨  
慶應義塾大学 法学部

櫻井 千浪  
東京医科歯科大学 医学部

杉岡 昌太  
大阪府立大学 人間社会学部

杉山 和  
武蔵野美術大学 造形学部

森田 真弓  
東京大学 経済学部

八木澤 龍太  
明治大学 文学部

Jillian Anderson (Chair)  
Colgate University

Zachary Callaghan (Vice Chair)  
Cornell University

Rachel Horton  
Villanova University

Kimberly Julien  
Villanova University

Jose Lamazares  
Duke University

Andrew Leistensnider  
Baylor University

Danielle Wilson  
Tufts University

Stephen Zellmer  
University of Wisconsin-Madison



# 分科会 Round Tables

日米学生会議の全ての参加者は7つの分科会のうちいずれか1つに所属する。各分科会は、5月から本会議に向けて事前準備活動を行う。本会議では「衝突と理解から生まれる新たな意志～未来を構築する力へ～」というテーマの下、ディスカッションやフィールドトリップ等を通して1ヵ月間共に考え抜く。いずれの分科会も専攻を問わず多様な学生の参加を望む。

## 環境と科学技術

科学技術の発展により人類の生活は劇的に変化した。生産力は大幅に向上し、利便性を高めてきたが、一方で地球の生態系と自然環境に悪影響を与える、地球温暖化、大気汚染のような環境問題が発生した。「不都合な真実」は改めて地球温暖化の脅威を再認識させ、環境を守る努力の大切さを啓発した。しかし温室効果ガスの削減や、再生可能エネルギーの開発が試みられる中、京都議定書などの環境条約が今なお機能しているかどうかは疑わしい。環境負荷を抑制する手段について様々な情報が交錯する現代社会において、今や企業だけでなく一般市民にも環境リテラシーの向上が求められるようになってきた。当分科会では環境問題を地球温暖化だけではなく、放射能汚染や水質汚染などの汚染問題、エネルギー問題、ゴミ問題などに至るまで多角的に捉え、それらを踏まえた上で、それらの問題をどのように解決すべきか考察していく。

## 現代社会における企業活動と倫理

近年、企業活動は社会の様々な分野で行われ、企業は社会の一員として高い倫理観を持って行動しなければならない。これに伴い企業の社会的責任（CSR）という概念が注目され、企業は利益追求だけではなく、社会や環境にも配慮した活動に取り組むことが求められている。例えば「地域社会との共生」は、しばしば社会的責任の1つと言われる。各国、地域の文化や慣習を尊重し、さらに雇用創出などによって地域社会の発展に貢献することを、指針に掲げている企業も多い。環境という観点では、CO<sub>2</sub>排出量削減による地球温暖化対策や、製品リサイクル技術による循環型社会への貢献など、企業の環境保護への取り組みが重視されている。企業はどのように、経済的、社会的、環境的側面に配慮しながら、企業価値を向上させ、持続的成長を図るべきだろうか。当分科会では、企業が守るべき倫理とは何か、CSRのほか具体的な事例を取り上げて考察する。

## 人権問題と我々の責務

21世紀を迎えた今日、人権という概念は急速に世界に広まった。基本的人権は、国籍、年齢、性別、人種、宗教、言語や地位に拘らず、全ての人々が有する権利である。グローバル化は、人々に経済的豊かさをもたらした一方で、貧富の差を拡大させ、新たな人権問題を生み出した。実際、日米におけるホームレスや若年失業者は増加しており、彼らへの自立支援や人権保護が両国にとって新たな重要課題となっている。また、2000年に採択されたミレニアム開発目標は、目標の1つとして「極度の貧困と飢餓の撲滅」を掲げているが、いまだ世界人口の6分の1が1日1ドル未満で生活している。当分科会では、極度の貧困問題、紛争時に見られる民族浄化、奴隸制度や強制労働、拉致問題、同性愛者に対する差別など、様々な人権問題を取り上げ、基本的人権とは何かを再考する。そして未来へ向けて、政府やNPO、一般市民である私たちに何ができるのかを模索する。

## 安全保障と日米

21世紀の世界は、核兵器や生物化学兵器など大量破壊兵器の拡散や民族、宗教的対立を根源とする地域紛争、非国家主体による国際テロなど新たな脅威に直面している。日本周辺では、中国の軍事的台頭や海洋権益拡大への強硬姿勢、北朝鮮の核開発問題など多くの不安定要因が依然存在する中、沖縄米軍基地の役割が改めて見直されている。日米は東アジアの安全確保のためにいかに協働していくべきか。また、ソマリア沖の海賊対策やアフガニスタン、イラクでの人道復興支援など、テロの温床となりやすい地域の安定化が新たな脅威を軽減する手段として認識される現在、日米同盟の機能の拡充が期待されている。両国は今後、アジア太平洋地域の枠組みを超えて、国際社会の安全保障のためにいかなる協力体制を築いていくべきか。当分科会では日米安保を多角的に分析し、「世界の中の日米同盟」として日米が今後取り組むべき課題を考え、両国協働のるべき姿を模索する。

## グローバル化における文化芸術

グローバル化が進む中、文化芸術は他国を惹き付けるソフトパワーとなっている。ハリウッドは、アメリカが掲げる自由主義や民主主義を映像の形で世界中に発信した。日本のファッション、アニメ、食文化などがCOOL JAPANとして海外で注目を浴びている。例えば、漫画 ONE PIECE は世界30ヵ国で翻訳され、28ヵ国で放映されている。また、茶道や華道、工芸品など日本の伝統文化も発信されている。伝統文化は、デジタル化や国際化により、今後どのように保存されていくのだろうか。風呂敷は、海外で使用された時、スカーフや壁飾りなどとしても利用されている。このように、文化は他地域に伝播すると、その地域文化の影響を受け、融合されることもあり、また、全く違う文化を生む可能性もある。これが人類の文化の発展や継承につながる。当分科会は、グローバル化やデジタル化が文化芸術にどのような影響を与えたのか考察し、今後どのように進化し、継承されていくのかを話し合う。

## 災害復興と社会の再構築

未曾有の大災害となった東日本大震災からの復興は、単なる復旧にとどまることなく、被災地を活力ある地域として再生させるとともに、日本社会の再生に資するものでなければならない。そのため内向きにならずに、自由貿易協定（FTA）の締結や環太平洋経済連携協定（TPP）の参加により市場を開放し、新興国の成長を被災地域の産業活性化や日本経済の再生に取り込むべきとの動きもあるが、異論も根強い。若年人口が流出してしまったこと、被災地域に自力で復興する財力が欠如していた点など、ハリケーンカトリーナに見舞われたルイジアナ州ニューオーリンズは東北地方との共通点が多く、復興に取り組む上での教訓が得られる。復興は被災前から懸案であった課題を解決する好機ともなる。当分科会では、国内外の災害復興を取り上げ、ケーススタディを重ねることにより、復興が創造的に社会の再構築を成し遂げる方法を模索する。

## パーソナル／ナショナルアイデンティティ

グローバル化が進み、多様な価値観を持つ人々が共に生活する今日の社会の中で、それぞれのアイデンティティを理解し合い、受け入れ合うことは、重要な課題となっている。移民の国であるアメリカでは、移民のアイデンティティは自らのルーツとアメリカとの間で、揺れ動く。第二次世界大戦中の日系2世は、日本人の両親を持ちながらアメリカで育ったことから、日本人とアメリカ人のアイデンティティの間で苦悩した。また日本では、アイヌや在日韓国・朝鮮人は、アイデンティティの危機に直面し、今なお社会的な差別に苦しんでいる。当分科会では、日米両国におけるアイデンティティの葛藤の事例を取り上げ、パーソナルアイデンティティとナショナルアイデンティティがどのように形成されるのかを調査する。そして、異なるアイデンティティを持つ他の者の価値観を尊重し、社会の中で平和に共存していく道を模索していく。

# 過去の参加者の声

## ヘンリー・A・キッシンジャー 氏 元アメリカ合衆国国務長官 1951年参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

## 片山直毅 慶應義塾大学法学部4年 2010年参加者

日米学生会議とは、72名の参加者がそれぞれの価値観をぶつけ合い、真剣に議論する場であり、1ヶ月の共同生活を通して言語や文化など種々の壁を越えて友情を育む場であり、その過程の中で生じる様々な葛藤を通じて自己の内面と対峙していく場です。日米学生会議という場が持つこのような「非日常性」は、大学で過ごす日常にはありえない多様な視点、視野の広がり、深い思考を参加者ひとりひとりに与えてくれます。私自身、この日米学生会議に参加したことで、歴史的な深みという縦軸と同時代的な広がりという横軸という全体像の中で物事を捉えることや、専門分野を超えて学際的に、国の枠を超えて国際的に対話を重ねることの重要性に気づかされました。また、日々変貌を遂げ、先行きの不透明な時代を生きる中、その変化や不安に圧倒されるほど単純な「答え」を求めてしまう私たちにとって、日米学生会議を通して「答え」の見えない問題についてとことん考え、徹底的に議論する時間は、その意味で本当に貴重だと思います。このような素晴らしい学びを与えてくれる日米学生会議に、一人でも多くの方に挑戦して頂ければ幸いです。

## 小田康弘 東京大学医学部3年 2011年参加者

皆さんは人生を変える出会いを経験したことがありますか。私は高校2年生の時に初めて出会ったJASCが自分の人生を変えたと感じています。当時私は広島学院高校のESSに入っていて、たまたま第59回JASCの広島サイトに現地高校生として参加しました。日本人、アメリカ人大学生70名余りが、英語で真剣に議論し、腹を割って笑いながら語らい合い、自分たちの将来を考え抜こうとしている。その姿に大きな刺激を受け、「大学生になったらJASCに参加したい」と強く思うようになりました。それから4年越しの縁で、大学生として参加した第63回JASC。分科会以外のマイテーマとして、ヒロシマの経験を伝えること、核兵器、安全保障の議論で皆から学ぶことを心に抱いていましたが、これに留まらず様々なことを70人の仲間と語り合いました。みんなが心の壁を取っ払って、自分の限界という天井を突き破って、自分に素直にとことん挑戦する、そのような時間を共に過ごせた仲間は一生の宝です。また、JASCを通して医師を志した原点を見つめ直すことができ、今の自分が進む道を決めることができました。挑戦の場と一生の宝を求めている方にJASCを強くお勧めします。

## 宮澤喜一 氏 元内閣総理大臣 1939, 1940年参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

## 井上聰美 筑波大学社会・国際学群3年 2010, 2011年参加者

私にとっての日米学生会議とは何だったのか。本会議が終わった今でもよく考えます。未だに明確な答えは出せていませんが、たくさんの「出会い」の場であったということはひとつめになると思います。時に競い合い、時に助けあう71人の仲間との出会い。豊かな人生経験からたくさんのアドバイスをくださる素晴らしいOB・OGの方々との出会い。事前研修と本会議におけるプログラムを通じた多様な社会問題との出会い。そして1ヶ月の共同生活の中で気付く新たな自分自身との出会い。これらの出会いがどのような意味を持つかは参加者によって異なると思いますが、ただひとつだけ共通しているのは、それらの出会いが人生を変える出会いだということです。日米学生会議はひと夏限りの経験に留まらず、その後の人生にも大きな影響を与える大きなチャンスです。私はこれまでの2年間の日米学生会議の活動の中で出会った私自身の課題の答えを今でも追いかけています。第64回の参加者にもこれからこういったたくさんの出会いがあることでしょう。私もOGとしてみなさまとお会いできる日を心から楽しみにしています。

## 佐々木いくえ 東北福祉大学健康科学部3年 2011年参加者

私は今でも忘れる事ができない。大震災から1週間、実行委員長から電話を受け取った時のことを。実行委員の皆が応募者全員の安否を案じ、宮城県石巻市に住むまだ会ったことのない私に何度も電話を掛け続けてくれた。その「温かい心」無しに、私が学生会議に参加することは不可能だった。学生会議参加という「夢」は、自衛隊の配給に並び、1日を無事に生きることが精一杯な私に希望を与えた。会議に関わる多くの方が「震災を理由に参加を諦めることだけはしたくない。」という私の想いを守り支えて下さったおかげで、未曾有の事態から立ち直り、再び前を向くことができた。合格通知から参加実現までの多くの障害を乗り越えられるように助けて下さった皆様、余震に怯える私を強く抱きしめてくれた仲間には、感謝の気持ちを生涯伝え続けても伝えきれない。学生会議は、議論を通じた日米関係の構築や貴重な学びのみならず、1人の人間を救い、国難の最中であっても日本には希望を持ち続ける学生が多くいることを証明した。大震災に負けてなるものかという強い意志が、会議に関わる全ての人に共通して有り、その意志が第63回日米学生会議を創り上げた。奇跡を可能にする力が日米学生会議にある。

# JASC NETWORK

## 国際社会で活躍する日米学生会議の過去の主な参加者

- 天野順一（元三井物産副社長）
- アレン・マイナー（サンブリッジ会長）
- 井伊雅子（一橋大学大学院国際・公共政策大学院教授）
- 猪口邦子（参議院議員）
- 今井義典（元NHK副会長）
- 内古閑宏（ヴィジョニア社長）
- 國弘正雄（元参議院議員・同時通訳者）
- グレン・フクシマ（エアバス・ジャパン取締役会長）
- 小林薰（産業能率大学名誉教授）
- 高橋和夫（放送大学教授）

日米学生会議では、同世代のみならず多くの先輩や関係者と触れ合う機会を大切にしている。勉強会やフォーラム、レセプションなどを通じて、5000人を超える様々なOB・OGと交流し、アドバイスを得る機会を持つ。

- 竹村健一（評論家）
- 橋・フクシマ・咲江（G&SGlobal Advisors 代表取締役社長）
- 橋本徹（日本政策投資銀行社長）
- 広中和歌子（前参議院議員）
- 船瀬俊介（環境問題評論家）
- 楳原稔（三菱商事相談役）
- 三浦俊章（朝日新聞論説委員）
- 茂木健一郎（脳科学者）
- 八木健（ペイビュー・アセット・マネジメント代表取締役）
- 八城政基（元新生銀行取締役会長）

# 第 64 回会議の流れ（予定）

※春合宿、防衛大学校研修、直前合宿、本会議は参加必須の公式プログラムです。

4月上旬

参加者決定

5月5日～7日

春合宿 全参加者が初めて顔を合わせる場となる。

6月

自主研修 有志の参加者で国内の都市を訪れ、現代社会が抱える問題を直接考える。本年度は東北地方を予定しており、地元の方々との交流やボランティア活動を通して災害からの復興について学ぶ。

防衛大学校研修

防衛大学校に1日訪問する。教授の講義を受けたり、校内を見学するほか、防衛大学校生とディスカッションやレセプションを通して交流する。

7月27日～7月28日

直前合宿 日本側参加者が集まり本会議に向けて最終準備を行う。

7月28日～8月20日

本会議 第64回会議は2012年夏にアメリカで開催され、日米それぞれ36人、合計72人の学生が1ヵ月にわたり共同生活を行う。

## 本会議概要

### 分科会 Round Tables

日米の参加者は7つの分科会のいずれかに所属する。各分科会ではそれぞれのトピックに沿って1ヵ月間議論を行う。

### フィールドトリップ Field Trips

全体あるいは分科会のテーマに即して、施設や企業、史跡を訪れ、見識を深める。

### スペシャルトピック Special Topics

参加者が各自の興味に応じて自由に議題を設定し、意見交換や議論を行う。

### フォーラム Forum

各開催地で、その地域に関連する問題や日米両国に深く関わるトピックを取り上げ、講師を招いて一般公開のフォーラムを開催する。

### リフレクション Reflection

参加者全員が一堂に会し、会議中に感じたことを自由に話すことで、相互理解を深める。

### ホームステイ Homestay

マディソンでホームステイを行う。

## 本会議開催地

### 第4開催地 シアトル（ワシントン州）

ワシントン州最大の都市シアトルは、緑と湖に囲まれたその美しい都市景観から、「エメラルド・シティ」の愛称を持つ。航空宇宙産業の雄ボーイングを始め、近年ではIT産業やバイオ産業が発達し、世界最大のソフトウェア会社マイクロソフトやネット通販最大手のアマゾン、グローバル展開を続けるスター・バックスなど先端企業が集積している。また環境に対する意識も高く、世界をリードする環境先進自治体としての側面も持つ。州、郡、市の行政が、廃棄物のリサイクルや自家用車運転抑制などに一体的に取り組んでいる。環境に配慮しながらも着実に経済発展を遂げているこの地で、環境共生型社会を実現するためにはどのように企業活力の向上と自然保護活動を両立すべきか考察したい。

### 第3開催地 バークレー / サンフランシスコ（カリフォルニア州）

ゴールデンゲート・ブリッジやフィッシュヤーマンズ・ワーフなど、華やかな観光地で人々を魅了するサンフランシスコ・ベイエリア。湾の東岸に位置するバークレーはリベラルな都市として知られ、カリフォルニア大学バークレー校は1960年代の学生運動発祥の地とも言われる。サンフランシスコはアジア系移民を多く受け入れてきた歴史がある一方で、少数派民族排除の時代もあった。排日移民法や中国人排斥法によってアジア系移民は制限され、先住民は白人入植者に土地を奪われ、偏見や差別の目と闘ってきた。「人種のるつぼ」とも「人種のサラダボウル」とも言われる移民国家アメリカ。特定の人種、民族の権利をめぐる歴史を通して、少数民族のアイデンティティ問題を考え、多様な人種が共生するための道を模索したい。

### 第2開催地 マディソン（ウィスコンシン州）

豊かな自然と観光資源に恵まれたウィスコンシン州は、酪農と食品加工業が盛んである。州都マディソンには、州立版アイビーリーグのひとつに数えられるウィスコンシン大学があり、公教育の水準も高い。市内では夏と冬に毎週、州特産の農産品を扱う全米最大級のマーケットが開かれ、多くの人々で賑わう。一方、他の多くの州同様、州財政は悪化し、赤字削減のために州職員の労働条件が見直された。財政危機克服のため、州政府はどのように増収を図り、歳出を抑制しながら適正な住民サービスを提供していくべきか。ティーパーティーが台頭し反格差社会デモが拡大する中、富裕層への増税や社会保障費の削減は可能なのかなど、連邦政府の債務問題も併せて考察したい。

### 第1開催地 ダラス（テキサス州）

テキサス州北部に位置する近代都市ダラス。第64回日米学生会議は市中心街北方にある南メソジスト大学からスタートする。ダラス経済は油田開発によって発展し、大手石油資本エクソンモービルや、世界的半導体企業テキサス・インストラメンツの本社がある。国際的に開けた都市であり、ダラス・フォートワース空港はハブ空港として世界第3位の離発着数を誇る。一方で、不法、合法の移民流入が顕著で、全人口の3分の1強をヒスパニック系が占めるまでに膨れ上がった。近年、全米で最も危険な都市の上位にランクインし、治安は悪化の一途をたどっている。第1開催地では、文化の多様性を維持しながら都市の安全性を向上させるために何ができるのか考えたい。

# 第 64 回日米学生会議 募集要項

以下の通り、第 64 回日米学生会議の参加者を募集致します。

## 開催期間

直前合宿：7月 27 日（金）～7月 28 日（土）

本会議：7月 28 日（土）～8月 20 日（月）

## 開催地

ダラス（テキサス州）、マディソン（ウィスコンシン州）、  
バークレー / サンフランシスコ（カリフォルニア州）、シアトル（ワシントン州）

## 募集人数

28 名

## 応募資格

日本国内の大学、大学院、短期大学、専門学校等に在学中の学生（留学生含む）

公式プログラム（春合宿、防衛大学校研修、直前合宿、本会議）は参加必須。

なお、公式プログラムに参加するために学校を欠席しなければならない学生には第 64 回日米学生会議主催者より「日米学生会議参加証明書」を発行する。

## 選考試験

<一次選考> 書類審査（応募フォーマットに記載された情報をもとに行う）

<二次選考> 面接（個人・グループ）、教養試験 ※一部英語含む

一次選考試験料：2,000 円 二次選考試験料：5,000 円

第一次選考試験合格者に対し、第二次選考試験を行う。遠隔地からの受験者には交通費の一部を補助する。

各種英語能力試験も参考資料の一部とする。（未受験者については第二次選考試験会場で英語能力試験の受験が可能）  
詳細はホームページにて発表する。

京都選考試験：3月 10 日（土）～3月 11 日（日）

東京選考試験：3月 18 日（日）～3月 21 日（水）

選考結果通知：4月上旬

## 応募方法

2012 年 1 月 14 日（土）～2 月 26 日（日）の間に、日米学生会議ウェブサイトにて

公開される申し込みフォーマットに記入後、電子メールか郵送にて応募。

2012 年 2 月 26 日（日）23 時 59 分必着。

## 参加費

25 万円（予定）

本会議中の宿泊、移動、食事の費用を含む。

また、春合宿、直前合宿中の宿泊費、食費については全額、移動費については一部補助が行われる。

自主研修、防衛大学校研修などについては、一部補助が行われる。

（賛助団体による支援により、参加者の個人負担は大幅に軽減されている。）

## 日本側参加者出身大学（50 音順）

※文理系、専門、学年を問わず、全国から  
多様な学生が参加しております。

青山学院大学	九州大学	静岡大学	筑波大学	東京工業大学	広島市立大学	宮崎大学
お茶の水女子大学	京都大学・大学院	首都大学東京	津田塾大学	同志社大学	福井大学	明治大学
海上保安大学校	京都外国語大学	上智大学	東海大学	東北福祉大学	防衛大学校	山形大学
金沢医科大学	熊本大学	聖心女子大学	東京大学	名古屋大学	法政大学	立命館大学・大学院
関西外国語大学	慶應義塾大学	千葉大学	東京医科歯科大学	一橋大学・大学院	北海道大学	琉球大学
岐阜大学	国際基督教大学	中央大学	東京外国语大学	兵庫県立大学	三重大学	早稲田大学 等

## お問い合わせ

日米学生会議事務局 〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-21 財団法人国際教育振興会内

TEL/FAX: 03-3359-0563 Mail: contact@jasc-japan.com Web: http://www.jasc-japan.com/

実行委員によるブログ、Twitter では、随時説明会などの最新情報を告知しております。是非ご覧下さい。

公式ブログ: http://jasc64th.blogspot.com/ Twitter: http://twitter.com/jasc\_ecs

ご不明な点がございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。また、ウェブサイトより資料請求が可能です。

財団法人国際教育振興会

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-21

TEL: 03-3359-9621 Mail: info@iec-nichibei.or.jp Web: http://www.iec-nichibei.or.jp

日米会話学院、日本語研修所の運営のほか、外国人による日本語弁論大会、米国大学日本研修

プログラム等を実施しています。

